

山と博物館

第51巻 第7号 2006年7月25日

市立大町山岳博物館



立山カルデラ上空より(10月) 撮影 立山カルデラ砂防博物館

中央尾根の左、手前に針ノ木岳。手前の尾根、左側から獅子岳、ザラ峰、鷲岳、鳶山。

異人たちが訪れた 立山カルデラ

高野 靖彦

弥陀ヶ原台地の南に隣接する立山カルデラ。そこは今も崩壊を繰り返し、荒々しい地肌を露わにしています。明治初年、この崩壊地を通過し、ザラ峰と針ノ木峰を越え、平村野口（現大町市）へ続く山道が開削され「立山新道（針ノ木新道）」と呼ばれました。

政府に雇われて来日した異人たちは、夏期休暇を利用して、日本各地を旅行しました。彼らが好んだのは、北アルプスの山岳美とそこに息づく独自の文化でした。イギリス大使館のサトウは、立山新道を利用し、「雪の溶けた二、三日間、牛が通過した」と報告しています。明治八年、イギリス人のガウランドが、外国人初の立山登頂を果たし、翌年にはドイツ人地質学者のナウマンが、立山周辺の地質を調査。彼らの登山は、従来の信仰登山とは大きく趣を異にしており、調査・研究が主な目的でした。

今夏、立山カルデラ砂防博物館では、企画展「異人たちが訪れた立山カルデラ」（七月二十二日～八月三十一日、観覧無料）を開催いたします。越中と信州を結んだ山の夢、立山新道。当時の異人たちの目に映った立山カルデラとはどのようなものだったのか。市立大町山岳博物館のご協力のもと、資料・映像等により北アルプスの知られざる一面をご紹介いたします。

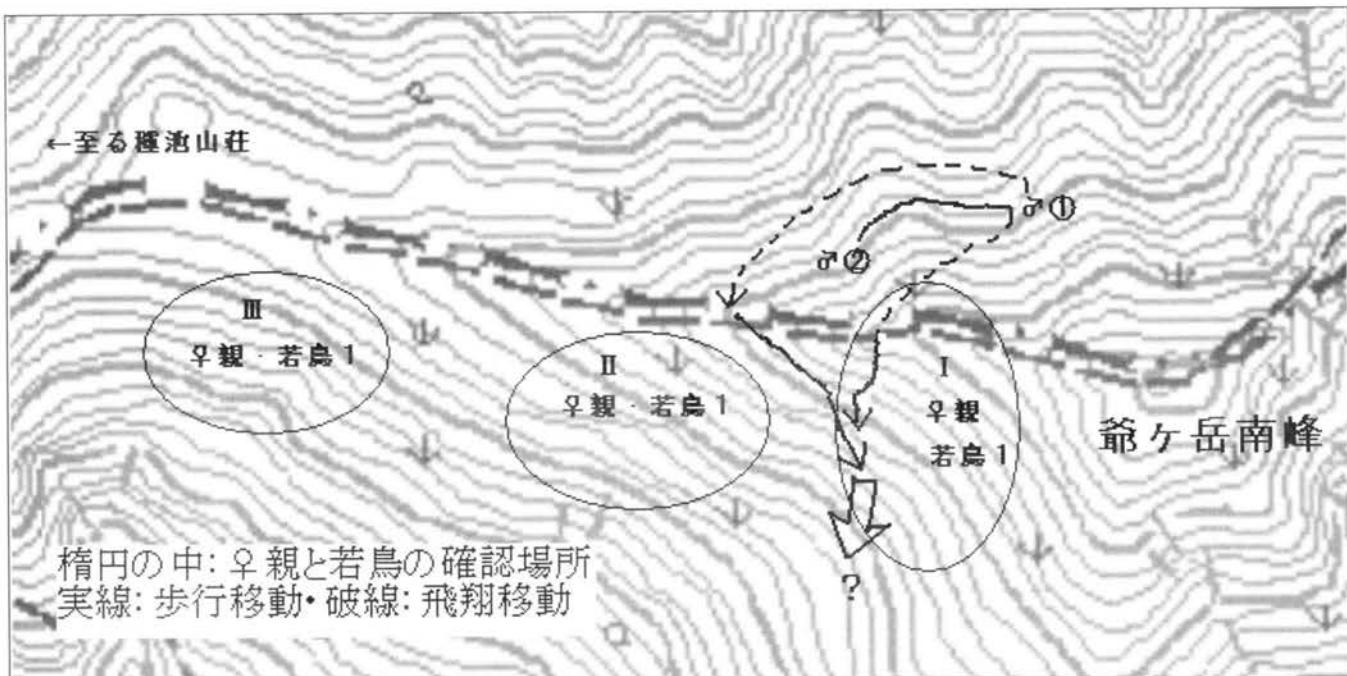


図1 個体位置図

・観察者：清水博文・関悟志
・家族群崩壊期における行動
観察した各個体の位置関係は図に示したとおりである（図1）。
オスの追尾行動：九月二九日一五時二〇分—一六時〇〇分にナワバリ形成期におけるオスのナワバリ防衛的な行動を観察することができた。メス一・若鳥一の行動圏で活動しているオス一との三個体の行



写真1 コマクサをついばむライチョウ

この行動は、家族群の崩壊の頃に見られる翌年の繁殖期の順位がほぼ決められる秋分の頃のオスの間で行われる争い（平林一九九二）に該当すると考えられた。この時オスは二個体とも肉冠が明瞭に開いているのが観察できた。

目視確認したライチョウの食餌植物は次のとおりである（表2）。また、クロマメノキ等の果実を採食した餌由来と考えられる紫色を呈し、かなり水分含有量が多い糞を多数確認した。

採食行動

この行動は、動圏に隣接した場所にいるオス一において、オス同士の追尾行動が観察された。

一五時二〇分、オス（♂②）が鳴いた直後、もう一羽のオス（♂②）が鳴きながら♂①のいる方向に歩行移動した、対峙したところ直ぐに♂①が爺ヶ岳南峰の尾根へ飛翔した。

♂②は、登山道付近にいた親子（雌親・若鳥一）の所へ飛翔移動し、三羽となり行動するが、一五時三五分、♂②は若鳥を追尾する行動も見られた。一五時四〇分、♂①は、三羽のいる所へ歩行移動し、雌親に接近したところ、再び♂②が♂①を追尾し続け、一五時五〇分には四羽とも深いハイマツの中へ入り込んだ。

平林国男（一九九二）1. 北アルプスのライチョウ・ライチョウ 生活と飼育への挑戦（大町山岳博物館編）・四七一四九、信濃毎日新聞社、久保田政雄（二〇〇三）日本産アリ類全種図鑑、学習研究社。

（市立大町山岳博物館学芸員）

